
本当に勇者なら……

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当に勇者なら……

【Nコード】

N8100N

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

気付けばそこは、理解に苦しむほどに混沌とした森の中。ヒジリはそこが自分が元いた世界でないと気付く。認めたくない現実に混乱する中、そこに現れたのは妙に紳士然とした老人だった。

老人はヒジリをその世界の城に連れて行き、女王と会わせる。女王はヒジリを希望の星だと言うが……。

異世界召喚なんて、そんなものを信じたことはない。ぼくにとつての異世界召喚なんて、ファンタジー以外にほかならず、言ってしまうえば虚構で、現実に起きるはずのないことだ。そんなものを信じるなんて、今どき中学生でもない。小学生の中学年以下の子が夢見る程度で、現実の夢のなさに気付いた人たちは、その存在を否定する。

だから。

だから、ぼくがこんな意味不明で無秩序な、カオスな世界にいることは夢に違いない。

「……どこだよ、ここ」

あまりに暗いと思って空を見上げると、空には黒雲が立ち込めていて、今にも化物がその黒雲の間から現れそうだ。周囲は木々が生い茂り、ぼくが立っているこの場だけが岩で覆われていて、誰かが手入れをしているのか草一本生えていない。

「おや、成功したようですね」

突然声が聞こえ、ぼくは情けなくも腰を抜かしてしまった。

「ただただだ、誰だよっ！」

「おや、申し訳ない。私はエヤスと申します。ご無礼ながら、貴方様をこちらに呼び出したものでございます」

慇懃に礼をするこの男はどう見ても老人なのだが、棒を据えているかのようにシャキツとした背筋と落ち着いた声色は、そのような外見とは似つかわしくない。日ごろから身だしなみには人一倍の気を使っているのかもしれない。

「呼び出した……？」

聞き逃せない単語に聞き返す。

「はい。今、この世界は魔の温床でございます。跳梁跋扈ちやうりやうはつことはこのような有様をさすのでございましょう。それほどまでに、この世界

は魔に侵されているのでございます」

深刻そうにそういうエヤスさんは、言っている意味が全く分からないものの、とても困っているように見える。本当に言っている意味はわからないけれど。

わからなさ過ぎて困る。

「で、その話とぼく、一体どのように結び付くのですか？」

そもそも、ぼく自身、まだこの世界に呼び出されていることを信じたわけではない。見知らぬカオスなこの場所も、きっと何かの間違いだ。木に顔があるとか、鳥がやたらでかくてグロテスクだとか、きっと気のせいだ。

「それは城に向かう道中にて」

「エヤスさんはまた慇懃な礼をした。

「城、ですか？」

「はい。私、この大陸を統べる女王、レミア様にお仕えしております」

女王？

大陸？

は？

「はあ……で、その……ぼくは一体全体、どういう理由でここに呼ばれたのですか？」

「それはレミア様から直々に」

エヤスさんはそう言ってぼくに話してくれず、結局、ぼくは今王座の前に立っている。

豪華絢爛を絵に描いたような豪華な謁見の間。その最奥、これまで美麗なドレスを身にまとった妙齡の女性が、仰々しい王座に腰かけている。にこやかな笑みは威圧感がなく、本当に女王なのかと疑いたくなるほど、近い存在に感じられる。

「貴方、お名前は？」

静かで上品な声。

「え……あの、その……ひつ聖、です」

とはいえ、どれだけ近い存在に感じられても目の前に座っているのは女王。緊張しないはずがない。

「ヒジリですか。私はこの国を統べております、レミアでございませう。よろしくお願ひしますね？」

「は、はあ。こ、こちらこそ」

正直に言ってしまうと、ぼくはあまりよろしくせず、そうそうに家に帰りたなのだ。

「突然の召喚で申し訳ないのですが、こちらにも緊急を要する事情があるのです」

「深刻な面持ちでレミアさんは語り始めた。

「 と言いますのも、今までは日陰で暮らしていた魔が今、日向の舞台に立とうと勢力を拡大しているのです」

それは知っている。エヤスさんもそんなことを言っていた。でも、ぼくが知りたいのはこの世界の事情ではなく、ぼくの身の安全と保障と帰宅の可否だ。

「そこで我々は我々が王家に伝わる秘術を用い、異世界から勇者としての資格があるであろう人物を召喚したのでございます。それがヒジリ あなたです」

「ビシ、と指さすようなぶしつけなことはしなかったけれど。レミアさんの言葉は完全にぼくを指さしていた。

「い、いや、ぼくはただの学生……」

「私たちの希望の星。我々に希望の光がさしたのです」
……………。

人の話、聞いてない。

「ですから、私たちはあなたに魔の長の討伐をお願いしたいのでございませう」

討、伐？

「引き受けてくれますね？」

期待と希望に満ちあふれた瞳。そんな目で見つめられては、ぼくもうなずきたくなってしまう。

「ぼくは、家に帰りたいです。元の世界に戻りたいです」

命がけの斬った張ったなど、ぼくには似合わない。この世界の事なんてどうでもなれ、なんて冷血なことは思っていないけれど、自分の命も大切だ。

「魔を討伐しましたら、私たちが責任を持って命がけで元の世界に送り届けます」

「だから、ぼくは今すぐ帰りたんだ！」

レミアさんは悲しげにまぶたを伏せ、今にも泣きそうな、震える声で、

「貴方が最後の希望なのです。貴方を召喚するために、こちらは失敗を繰り返し、すでに二十人の命を失いました」

と言った。そして、キツと顔を上げて、

「貴方が最後の、最後の希望なのです！」

と、魂を揺さぶるかの如く力強い声で言ったのだ。

結局、ぼくはレミアさんの願いを聞き入れ（それ以外に選択肢はなかった）、魔の長の討伐に発つことになった。

「ヒジリ、貴方にこれを……」

ぼくの前に届いたのは、銀色の輝く剣（こゝろ）と鉄製の小型の盾、そして銀貨が一枚。

「えっと……銀貨一枚って、一般庶民の生活ではどれくらいの期間生活できますか？」

ぼくにはこの銀貨の価値が全く分からない。もしかしたら、装備は貧弱だけどここの銀貨はすごい価値を持っており、それで自分に合った装備を見つけて来いということなのかもしれない。

「えっと……エヤス、どれくらいですか？」

「おおよそ、一週間もつかどうかでございます」

何でもなさそうに、エヤスさんは言った。

「ぶふうっ！」

思わず吹き出してしまふ。

「なにか？」

きよとんとした表情のレミアさん。

「あの……ぼくって、魔を、しかも長を討伐するんですよね？」

「はい」

「たとえばこの剣って、何かしらのいわれがあつたりとか……」

「しません。一般的な剣です。安売りをしていましたので」

安売り……？ 王家なのに変なところで庶民的だ。

「実はこの盾には秘められた力が……」

「ありません。ただ、王家の紋が施されています」

「あの……たとえば何かしらの魔法的なもので、ぼくを強化してくれるとか……」

「ありません」

そこでレミアさんは初めて、ぼくに飽きたような顔を見せた。

実際、ものすごく嫌そうな顔で溜息をついたのだ。

「何なのですか？ そんなわけないじゃないですか。貴方は我らの希望の星。ですが、残念ながら、それらを装備しても私たちよりも弱い」

「は？」

「なんで驚いているのですか？ 魔力を持たない脆弱な人間が、我々よりも強いはずがないではありませんか」

あっけらかんと言つてのけるが、ならなんでぼくを呼びだしたのだ。

「我が国の民を危険に晒すわけにはいきません。犠牲になつた二十人も、囚人なのです」

愕然とするとは、まさにこのことか。空いた口は閉じられないし、思考もストップしているようにさえ思う。

「何せ、魔はまるで世界から愛されているかのごとく圧倒的な力を持ち、圧倒的な破壊力で持つて我々を襲います」

すごく泣きたくなってきた。

「貴方はいわば人類……いえ、世界最弱。でも」

「

レミアさんはそこで言葉を切り、優しい、慈愛に満ちた笑みを見せた。

その笑みにぼくは救われたような気になった。きっと、ぼくに何らかの力添えをしてくれる。そう確信できる笑みだったからだ。

「勇者様なら、我々の希望の星である貴方なら、その程度の苦境なんてはねのけてしまいますよね？」

もう一度見せた優しい笑み。

ぼくはそれが悪魔の嘲笑に見えた。

(後書き)

楽しんでいただけただけでしょうか？

この手のものは書いたことないので、非常に不安定な心境です。
よろしければ、感想なんかいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8100n/>

本当に勇者なら……

2010年10月8日13時50分発行